大網ロータリークラブ

Club Weekly Bulletin

■クラブ創立：2000 年 1 月 13 日
■例会日：水曜日（12：30～13：30）
■例会場：中部コミュニティセンター
TEL 0475-73-3337 FAX 0475-73-4360
■事務所：〒299-3251
大網白里市大網 450-6　ユアサビル 2 階
TEL 0475-70-0200 FAX 0475-70-0222
■会 長：大越 将司　幹 事：星野 実
■広報・公共イメージ向上委員会
委員長　小倉 光夫・会報担当　石田 英世

2024 年　6 月 26 日(水)
第 25 巻　第　44 号
通巻第１０７４

http://www.oamirotary.com
E-mai：rc@oamirotary.com

世界に希望を生み出そう

本日の例会

点　　鐘　会長　大越 将司
ソ ン グ　我等の生業
会長挨拶　会長　大越 将司
幹事報告　幹事　星野 実
ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ
引継夜間移動例会　はせ川にて

ニコニコ BOX

大越 将司 会長
小髙さん、おかえりなさい。
お待ちしておりました。。
星野　実 幹事
1 年間ありがとうございました。
小髙 徹 会員
5 月 12 日脳梗塞発症いたしましたが、幸いにも軽度ですんでおります。
ご心配おかけいたしました。

例会日	6 月 19 日	6 月 5 日
会員数	31	31
出　席	18	19
欠　席	13	12
M　U	0	0
免　除	7	5
出席率	81%	77%

会長挨拶

大越　将司　会長

　みなさん、こんにちは。
梅雨はどこへ行ってしまったのか、という暑い日が続いています。
土日に雨が降り、ようやく梅雨入りとの予報です。
梅雨入りが遅い年は、短期集中となり、1 回あたりの降水量が多いとのこと。
「備えあれば患いなし」今年も豪雨に備えておきましょう。
　さて、来週は夜間移動例会ですから、私の会長挨拶も事実上本日が最終日となります。長かったですが、大変勉強になりました。貴重な機会をありがとうございました。
いつも当日朝のニュースや朝刊をみて、ネタ探しをしていました。
昔、テレビ局のＡＤをしていたころを思い出し、懐かしく感じておりました。
　最後のネタは朝刊のコラムにあった「人口戦略会議」にしたいと思います。
「人口戦略会議」とは、日本製鉄・三村明夫名誉会長が議長を務める、経済界や学者などで構成された有識者会議のことです。
日本の人口減少問題に対処するために立ち上げられました。
この会議が着目しているのは２０～３９歳の「若年女性人口」です。
2020 年から 2050 年の 30 年間で、この人口が 50%以上減少する自治体を、「消滅可能性自治体」とし、全国 1729 のうち 744 の自治体が該当すると発表しました。
この分類の自治体が最も多いエリアが東北地方７７%。次が北海道６５%とのことです。　今回興味深かったのが、自治体をさらに分析し、「ブラックホール型自治体」と「自立持続可能性自治体」としていることです。
「ブラックホール型」とは、出生率が低く、他地域からの人口流入に依存している自治体のことで、東京など２５自治体が該当します。千葉県では浦安市・酒々井町です。一方「自立持続可能性自治体」とは、若年女性人口の減少率が 20%未満の自治体とし、100 年後も若年女性が 5 割近く残存しており、持続可能性が高い地域です。65 の自治体が該当し、特に九州・沖縄で 34 自治体と半数以上を占めています。千葉県では流山市・印西市が該当します。
　では、われらの大網白里市はどうかというと、「その他の自治体」に該当します。30 年後の若年女性人口の減少率は、３８%と 5 割には達しませんが、対策が必要は地域であることには変わりありませんが、前回 2014 年の調査より 4.3 ポイント改善しておりますので、金坂市長に期待しましょう。

　以上で、私の会長挨拶といたします。

卓　話

神道研究家　木村　和彦　様

「『古事記』に学ぶ伝統的な日本のこころ」

本日は、『古事記』を通じて、伝統的な日本のこころ、世界観のお話をします。

国を強くする策

六世紀の終わり頃、中国大陸では戦乱が続き、日本も国を強くしないと滅ぼされると考えられていました。国を強くする方策の一つとして、中国の言葉で書かれた歴史書が『日本書紀』で、古くから独立国であることを示しました。

当時の日本の言葉で書かれた物語が『古事記』で、国を守り栄えさせる日本のこころを伝えるためのものでした。

『古事記』の読み方は長く失われていましたが、その「こころ」は、皇室や、伊勢神宮を始めとする神社の祭祀、おまつりで伝えられてきました。先人がおまつりで伝えてきた「こころ」を、『古事記』を読んで確かめることができます。

天地初発

『古事記』の冒頭は、伝統的な日本の世界観を表しています。

天地初めて發(ひら)けし時、高天の原(たかまはら)に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巣日神。次に神産巣日神。この三柱(みはしら)の神は、みな獨神(ひとりがみ)と成りまして、身を隠したまひき。

永遠に続くこの世、永遠に生きる御霊

ここで示されているのは、神が世界を創ったのではなく、世界から神が生まれた、ということです。天地があって、高天原があって、そこから神が生まれたと信じられてきました。

もう一つ大切なことは、神が身を隠した、ということです。神様はこの世から身を隠したけれども、存在し続けています。

この後の『古事記』の物語でも、高御産巣日神、神産巣日之神は重要な役割を演じています。

永遠の過去、モノが存在を始めたその時から神があり、永遠の未来、モノが存在しなくなる時まで神があり続ける、ということです。

始まりと終わりがある世界

対比のために旧約聖書の世界観を見てみましょう。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の世界観は、すべて旧約聖書に基づいています。この世の外にいる創造神、神様が、この世を七日間で作ったとします。

最初の人間、アダムとイブはエデンの園で蛇にそそのかされて知恵の実を食べる罪を犯し、神に死と労働という試練を与えられます。

この世では、神と悪魔との闘いが続き、最後の戦いでこの世は破壊されます。戦いに勝った神は、今までに生きたすべての人間を遺体からよみがえらせて、天国に行くか、地獄に行くか、審判をします。

つまり、この世には始まりと終わりがあり、人間には原罪があるため、神に与えられた試練を乗り越えなくてはならず、世界の終わりに神に裁かれ、天国に上るか地獄に落とされるかする、という考え方です。

資本主義につながったとされる予定説では、神に救われるために、神に与えられた試練を乗り越える必要がある、すなわち仕事で成功する必要がある、つまり働かなくてもよくなる必要がある、といいます。

修理固成の詔

さて、天つ神は「国を作り整え、固めて完成させなさい」という御言を、天の沼矛というモノに宿らせて伊邪那岐命(いざなぎのみこと)、

伊邪那美命に渡します。
伊邪那岐命、伊邪那美命は、天つ神の御心を受けて国作りを行います。
ここに天つ神　諸の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「この漂へる國を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。

慎みを失った伊邪那岐命、伊邪那美命

伊邪那岐命、伊邪那美命は、慎みを失い、感情のままに動いて国を生むことに失敗します。
天つ神の御心を占いで確認し、慎みをもってやり直して日本列島を生むことができました。

黄泉国訪問

　その後、伊邪那岐命、伊邪那美命は日本列島の島々を産み、風邪の神、海の神、山の神、野の神、川の神などを産みます。最後に伊邪那美命が火の神を産むと、伊邪那美命は火傷を負い、ついに亡くなってしまいます。
伊邪那美命が亡くなると、伊邪那岐命は転げまわって泣き悲しみます。そして、伊邪那美命を葬ると、火の神を剣で斬り殺します。伊邪那美命は黄泉の国、あの世に行ってしまいましたので、伊邪那美命は会いに行きます。　そして、天つ神に言いつかった仕事がまだ終わっていないから、葦原中国、この世に帰ろう、と言います。伊邪那美命は黄泉の国の火で作ったモノを食べたので、帰ることはできません。しかし、黄泉の大神と交渉してこようと言います。
伊邪那美命は自分の遺体は見るなと言って交渉に行きます。慎みを失った伊邪那岐命は遺体を覗き見ます。
蛆がたかり、腐乱した遺体を見た伊邪那岐命は、恐ろしくなって逃げだします。
伊邪那美命は、恥をかかされたと言って、あの世の軍勢に追わせます。最後に、伊邪那岐命はこの世とあの世の堺に大きな石を置いて、行き来できないようにします。
　伊邪那美命は、この世の人間を一日千人殺す、と宣言します。伊邪那岐命は、1 日に千の産屋を建てる、と言い返します。
　ここから先は次回、詳しくお話しますが、簡単に申しますと、この世に帰って来た伊邪那岐命は、穢れを落とすために、海に入って禊をします。そして、禊の最後、極限まで穢れがなくなった伊邪那岐命から産まれたのが、天照大御神、月読命、須佐之男命の貴い神々です。貴い神様のお話は次回にいたします。
　今回は、あの世とこの世の関係を、少し詳しくお話したいと思います。
伊弉諾神（いざなぎのかみ）は、まっくらな中から、女神をお呼びかけになって、「いとしきわが妻の女神よ。おまえといっしょに作る国が、まだできあがらないでいる。どうぞもう一度帰ってくれ」とおっしゃいました。すると女神は、残念そうに、「それならば、もっと早く迎えにいらしてくださいませばよいものを。私はもはや、この国のけがれた火で炊いたものを食べましたから、もう二度とあちらへ帰ることはできますまい。しかし、せっかくおいでくださいましたのですから、ともかくいちおう黄泉の神たちに相談をしてみましょう。どうぞその間は、どんなことがありましても、けっして私の姿をご覧にならないでくださいましな。後生でございますから」と、女神はかたくそう申しあげておいて、御殿の奥へお入りになりました。伊弉諾神（いざなぎのかみ）は、永い間　戸口にじっと待っていらっしゃいました。しかし女神は、それなり、いつまでたっても出ていらっしゃいません。伊弉諾神（いざなぎのかみ）はしまいには、もう待ちどおしくてたまらなくなって、とうとう、左のびんのくしをおぬきになり、その片はしの、大歯を一本欠き取って、それへ火を灯して、わずかに闇の中を照らしながら、足さぐりに、御殿の中深く入っておいでになりました。そうすると、御殿のいちばん奥に、女神は寝ていらっしゃいました。そのお姿をあかりでご覧になりますと、おからだじゅうは、もうすっかりべとべとに腐りくずれていて、臭いいやなにおいが、ぷんぷん鼻へきました。そして、そのべとべとに腐ったからだじゅうには、うじがうようよとたかっておりました。それから、頭と、胸と、お腹と、両ももと、両手両足のところには、そのけがれから生まれた雷神が一人ずつ、全てで八人で、怖ろしい顔をしてうずくまっておりました。伊弉諾神（いざなぎのかみ）は、そのありさまをご覧になると、びっくりなすって、怖ろしさのあまりに、急いで遁げ出しておしまいになりました。女神はむっくりと起きあがって、「おや、あれほどお止め申しておいたのに、とうとう私のこの姿をご覧になりましたね。まあ、なんという憎いお方で

しょう。人にひどい恥をおかかせになった。ああ、くやしい」と、それはそれはひどくお怒りになって、さっそく女の悪鬼たちを呼んで、「さあ、早く、あの神をつかまえておいで」と歯がみをしながらお言いつけになりました。(中略)

神はそれをご覧になると、急いでそこにあった大きな大岩をひっかかえていらしって、それを押しつけて、坂の口をふさいでおしまいになりました。女神は、その岩にさえぎられて、それより先へは一足も踏み出すことができないものですから、恨めしそうに岩をにらみつけながら、「わが夫の神よ、それではこの仕返し、日本中の人を 1 日に千人ずつ絞め殺してゆきますから、そう思っていらっさいまし」とおっしゃいました。神は、「わが妻の神よ、おまえがそんなひどいことをするなら、わしは日本中に一日に千五百人の子供を生ませるから、いっこうかまわない」とおっしゃって、そのまま、どんどんこちらへお帰りになりました。

高天原、葦原中国、黄泉の国

葦原中国、この世と、黄泉の国、あの世(『古事記』では根の国、根の堅州国などとも呼ばれます)は、つながっていたということです。この世からあの世に行ったら帰って来れませんが、それでも伊邪那美命(いざなみのみこと)ほど力の強い神であれば、あの世からこの世の人間を千人殺すくらいのこと、呪うことはできると考えられています。伊邪那岐命(いざなぎのみこと)も、伊邪那美命(いざなみのみこと)の呪いを防ぐことはできないようで、殺されるなら産ませよう、と言ったわけです。　つまり、あの世からこの世は見えているし、あの世からこの世に影響を及ぼせる、と信じられていたのです。江戸時代の国学者、平田篤胤は、この世とあの世の関係を、夜の家の中と庭にたとえています。この世は夜に明かりをつけている部屋の中で、あの世は夜の庭であると言います。この世からあの世の様子は見えないけれども、あの世からはこの世の様子は良く見えている、と言うのです。あの世に行った人たちは、この世の人々を見守ってくれている、と信じられてきました。これは、現代の我々の感覚にも、生きている信仰と言ってよいと思います。

世界観の違い

先の大戦で戦場に出た方々が、死んでも仲間と国が栄えるのを見守ろう、死んだら魂となって「靖国で会おう」と言い合ったのも自然に感じます。　旧約聖書の死後の世界は、亡くなった人はよみがえって、一人だけで神に向かい合い、最後の審判を受けるというものです。個人主義になるべくしてなっているのかもしれません。　古い仏教の死後の世界観も日本とは違います。もともとは、永遠の輪廻転生、永遠に繰り返される苦しい人生から脱出できるのは悟りを開いて仏になることだけだ、と考えられています。個人の解脱が目標ですから、親子や夫婦の愛情も否定されます。しかし、そのままでは受け入れられなかったので、日本的な世界観に変化し、お弔いをすれば成仏できる、となりました。

儒教の世界観も日本の世界観とは違います。儒教では、君臣、親子の秩序は大変に厳しく言います。しかし、死後の世界や霊魂のことは語りません。

墓を暴いて死者を辱めるようなことができるのも、死後の世界を考えないからかもしれません。

参考

小野善一郎『日本を元気にする古事記の「こころ」改訂版』青林堂、平成 28 年

武田祐吉訳『古事記』角川文庫、昭和 31 年、青空文庫版